

ニートが妖怪退治を生業とする老人と出会い成長していく物語

ニートの妖怪退治

作・浜田

「登場人物」

ニート（25）・目的も無く惰性に任せてダラダラと生きている。

師匠（77）・妖怪退治のスペシャリスト。

高額な謝礼と引き換えに妖怪を退治する仕事を請け負う。

妖怪に悩まされるOL（24）・会社からの帰り道にあるトンネルに出没する妖怪に悩まされている。

トンネルに出没する妖怪（10）・目に見えない妖怪という設定なので配役は無し。

風や音で妖怪の居る事を暗示させる。

お屋敷に住んでいるお金持ち（58）・自宅の裏山に住み着いた妖怪に悩まされている。

キノコ取りに行った孫娘が妖怪の術で道に迷い
帰れなくなった。

裏山に住み着いた妖怪（999）・山に入って来る人にいたずらをして困らせる妖怪。
かなり手強い。

○公園 昼

ベンチに座ってボーツとしているニートに通りがかりの師匠が声をかける。

師匠・「だいぶ前からずっとそこに腰掛けてるようじゃが何もする事が無いならワシについてこい」

師匠の後について歩いて行くニート。

○師匠の事務所 夕方

師匠の事務所で机を挟んで向き合って椅子に座っている。机には電話が1つ置いてある。師匠の前には酒瓶とグラス。電話が鳴り仕事の依頼が入る。

師匠・「○○のバーで9時半、そこで話を聞こう」受話器を置く

師匠・「おい、出かけるぞ」ついて行くニート。

○バーのカウンター 夜

○1 風の女が1人カウンターに腰掛けている。隣に座る師匠。ニートもそのさらに隣に腰掛ける。

師匠・「それでは依頼内容を聞かせてもらおうか？」

○薄暗いトンネル 夜

○1 風の女が通りかかると突然風が吹いてスカートがまくれる。女性の悲鳴、その場を走り去る ○1

○バーのカウンター 夜

師匠・「妖怪退治は引き受けましょう、料金はこちらに……」といって女に紙切れを渡す。

○バーを出た場所 夜

師匠・「これで鏡と懐中電灯を買ってこい」
ニートにお金を渡す。

師匠・「出発は明日の朝だ。遅れるなよ」
ニートと別れる師匠。

○トンネルに至る道 昼

師匠と荷物を背負ったニートが歩いている。

師匠・「この妖怪は明るいとこに弱いはずじゃ、トンネルの反対側から懐中電灯と鏡で照らしてこちら側に妖怪を追い込め」

師匠・「出てきたところをこの黒い袋に閉じ込めておしまいじゃ」

師匠・「どうじゃ簡単じゃろう？」

ニート・「そんなに簡単に袋に入ってくれますか？」

師匠・「この袋の中は暗い、それから袋にはあの女の付けていた香水を振りかけておる」

○トンネル 昼

トンネルの反対側から追い込むニート、師匠はトンネルの出口で袋を広げて待ち構える。「シュボツ」何かが袋に飛び込む音、師匠は慌てて袋の口を閉じる。

○トンネルからの帰り道 夕方

袋を背負って歩きながら、

ニート・「師匠、この袋はどうするんです？」

師匠・「そーだな、どこか遠くに持って行って逃がしてやるさ」

ニート・「せっかく捕まえたのに？」

師匠・「まず1つ目に妖怪は殺しても死なない、2つ目には妖怪が絶滅すればワシの仕事も無くなってしまう。3つ目は約束通りトンネルから妖怪を追い出したのだから謝礼をもらっても誰も文句を言わないと思うがな」

ニート・「・・・うーん」

○師匠の事務所 昼

師匠とニートが向き合って座っている。電話が鳴る、ニートが電話を取る。

ニート・「はい、裏山の妖怪?・・・分かりました」ガチャ、受話器を置く

○金持ちの屋敷 昼

床の間のある和室の部屋で札束を積まれて仕事を依頼される。依頼内容は自宅の裏山に登った人間が何人か行方不明になっており先日は孫娘が山で道に迷った時に妖怪を目撃したらしい。悪い噂が広まる前に妖怪を退治して欲しいとの事。

金持ち・「先日、孫娘が山にキノコを取りに行った時に道に迷い妖怪を見たという事なのです。そのしばらく前から山に入った村人の行方が分からなくなっており心配していたのです。」

師匠・「すると村人の行方不明の原因が妖怪の仕業であると考えておられるのですな？」
金持ち・「はい。裏の山は先祖代々、私の家で受け継いで管理をしてきたのです。この山の中で問題が起きたとなれば村の人達にもご先祖様にも申し訳が立ちません」

師匠・「それでは早速明日の朝から仕事に取りかかるとしましょう」

○裏山 朝

山登りの途中、

師匠・「敵を知らなければ退治も出来ん。まずはどんな妖怪か調べに行こうかのう」
ニート・「たくさん糸を買ってきましたがこの糸どうするんですか？」

師匠・「今度の妖怪は幻影の術を使うようじゃ、幻影つまり実際には無いものを見せて人を惑わせる術じゃな、帰り道が分からなくなった時には目に頼らず糸を辿って帰れば無事に村に戻れるという寸法じゃ」

ニート・「なるほど」

師匠・「人は誰でも恐ろしいものを見た時に恐怖で体が動かなくなる事がある、しかし恐怖は自分自身が作り出した幻なんじゃ。惑わされてはいかん。冷静に真実を見極め行動する事で道が開けるのじゃよ」

○裏山 昼

妖怪登場、

ニート・「で、出たな妖怪」

師匠・「うむ」

しかし不意を突かれ妖怪にあっけなく師匠は倒される。

師匠は地面に倒れ動かなくなる。

ニート・「おのれ、師匠のかたきー」

妖怪に突っ込んで行くが軽く片手で止められる。

妖怪・「お前の事は見逃してやる、さっさとどこにでも去るが良い」

ニートはいったん引き下がるが糸巻きを持って妖怪の周りをグルグル走り回る。

妖怪は糸が巻き付いて動けなくなる。

妖怪が足に絡んだ糸によって倒れる。

いつの間にか起き上がっていた師匠が倒れた妖怪を袋に入れる。

○裏山 昼

草むらに腰を下ろして（足下には妖怪の入った袋）

師匠（服に付いた汚れを払いながら）・「どうやら二人とも無事だったようじゃな」

ニート・「師匠、なぜ妖怪は僕の事を倒さなかったのでしょうか？」

師匠・「倒さなかったんじゃない、倒せなかったんじゃない。お前の中にはもともと引き籠りという妖怪が潜んでいた。妖怪同士というものは人間と違って争ったりしないものなのさ。」

師匠・「しかし今回の騒動でお前の中の妖怪もどこかへ逃げ出したようじゃのう、これで仕事の手伝いは終わりじゃ、達者で暮らせよ」

老人は妖怪の入った袋を担ぐとニートに背を向けて歩き始める。
追いかけるニート、しかし見失う。

裏山 昼

仕方なく座っていた場所に戻ってくると師匠の座っていた所に札束が落ちている。ニートは札束を拾い上げ空を見上げる。

ニート・「師匠、忘れ物ですよ・・・」

空に師匠の顔が浮かび「その金は妖怪退治を手伝ってくれたお礼じゃ、好きに使うが良い」と聞こえた気がした・・・

完